

カメラのために演出されたニュース、疑似イベント（Pseudo-Event）

記事のURL

<https://www.gklibrarykor.com/ja/article/9995/>

PDFレイアウトのプレビュー - 本文の一部のみ

夜のニュースを見ていると、記者会見、新製品発表会、記念式典、授賞式のように、あらかじめ日時と場所が決まっている話題がやけに多いことに気づきます。地震や火災のように突然起きたことではなく、最初からカメラの前に立つために準備された出来事です。このように報道されることを目的として作られた出来事を指す言葉が「疑似イベント（Pseudo-Event）」です。疑似イベントとは、簡単に言えば「自然に起きたのではなく、メディアに報道され広く知られるように誰かが計画し演出した出来事」を意味します。アメリカの歴史学者ダニエル・ブーアスティン（Daniel J. Boorstin）が1961年の著書『幻影の時代』（The Image: A Guide to Pseudo-Events in America）で初めて示した概念で、今でも広報や政治、ニュース生産を分析する際によく使われます。本資料では、疑似イベントの意味と誕生の背景から、ブーアスティンが挙げた4つの特徴、身の回りの代表的な事例、そしてこの現象がニュースと世論に残す影響まで、順に見ていきます。報道のために演出される現実、疑似イベントの特徴と影響
報道・拡散を主な目的として企画された出来事を説明した概念図です。疑似イベントはすなわち偽情報という意味ではなく、企画の意図と資料・主張の事実性は別に検討する必要があります。計画されたイベントだと